

ヤバイ頑張りを  
自分で実験

庫発りべるき

本書は体験版です

## 〈はじめに〉

本編をお読みになる前に付属の利用上の注意をご確認ください。

この物語はフィクションです。実際の人物・団体・事件などとは関係ありません。

## 〈本編開始〉

人生において頑張ることは確かにいいことである。それにより得られるものもある。

しかし時には、無理に頑張ることがかえってよくないこともある。

精神状態において「頑張らないほうがいい状態」「頑張るとかえってマズイ状態」になってしまった人もいる。

そうなってしまった人を、こう言う者がいる。

「一生懸命頑張っていればそんな精神状態になっっているヒマなんかない。人として甘いところがあつたのではないか」と。

だが実際、病気の症状はその人がヒマかどうかの都合な

んぞ選ばないものである。

俺は昔、有名なスポーツ選手だった。

自分で言うのもなんだが、それなりに頑張ってきた。

しかし今まさに、「そんな精神状態」になっってしまったている。

そんな中、あえてトレーニングを頑張ってみる。偏見防止のための、人体実験として。

みんなには絶対マネしてほしくない「頑張り」だな。

俺がやってきたのは近くの運動公園。

簡単な運動にちょうどよい場所がある。

走り込みと体操を「頑張る」ことにした。

で、その後……

やっぱりしんどくなった。

しかし、まだ何とか頑張ってみる。どこまでやれるかわ

からないが、やるだけやってみる。

なんだか気分が悪い。それでもやるだけやってみる。そ

う自分に言い聞かせて。

で、さらにその後……

充実感も何もあつたものではない。どこかで一休みすることにしよう。

ベンチがあった。そこに腰掛ける。

しんどい状況下で俺は昔を思い起こしていた。

俺が陸上を始めたのは子どもころからだった。

中学・高校は陸上部だった。

特に高校での練習はハードだった。今やった運動とは比べ物にならないほどだ。

それでも今ほどしんどくなることは無かった。

頑張ったいい結果を出すんだ、そういった希望に満ちた思いが強かったものだ。

そして大学生、その後も陸上を続けていた。

高校、大学では選手として大会に出場し、それなりの成績を収めることができた。

その後、オリンピックにまで出場することができた。

メダルも取った。さすがに金、ではなかったが、銅メダルは何とかなった。

これが若き日の俺だった。

周囲の期待もそれなりに大きかった。

だが、プロのアスリートならそのくらいのは期待されるものだと思っていた。妙な言い方になるかもしれないが、あまり気にしていなかった。

俺は今、三十代前半。引退してからある程度の時間が経っている。

しばらくしてやっと状態が良くなった。もうそろそろ帰宅しよう。

今回の実験記録はいつ公表しようか？なんてことを俺は考えている。

それから数日後。俺はある医療機関へと向かった。

「頑張らないほうがいい状態」「頑張るとかえってマズイ状態」に対応している医療機関、とだけ言っておく。

そこで医師との話の中に：案の定、例の実験はオススメはしないというものもあった。というか、できないと言われた。

まあ、当然か。

やはり適切な治療に限る。

悪意はもちろんだメ。さらにその人のためを思っている言動であっても不適切なことも良くない。

善意の暴走も良くないってことだな。

さらに日数が経過したある日、俺はテレビを見ていた。

〈続きは製品版で〉

著者 庫発りべるぎ

発行 データコーディネートフォルダー  
二〇一四年 五月三日

(C) Kohatsu Riberuki 2014